

スケートボードにおける担い手 —街中で滑る者・スケートパークで滑る者—

中澤 勇真 (生涯スポーツ学科 地域スポーツ)
指導教員 黒須 朱莉

キーワード：スケートボード，立場，活動場所，競技種目

1. 緒言

これまで「悪ガキ」の街中における「遊び」として排除の対象となってきたスケートボードは、2020年東京オリンピック・パラリンピック（以下、東京2020）に競技種目として採用されたことから、「スポーツ」としての認知も進みつつある。本研究は、こうしたこれまで着目されてこなかったスケートボーダーたちにみられる多様な立場や活動場所との関係について注目した。

本研究は、近年のスケートボードの担い手たちの実際を明らかにすることを目的とし、スケートボーダーの目的と滑る場所には、どのようなパターンがあるのかを調査することを課題とした。具体的には、「遊び」もしくは「スポーツ」として行っているのかという観点から「競技者」、「非競技者」という立場を想定し、それぞれ「街中」と「スケートパーク」のどちらで滑っているのか、「ストリート」と「パーク」どちらの種目を選択して滑っているのかを調査、検討した。

2. 研究方法

大阪を中心として活動するスケートボーダー4名を対象とし、対面式の半構造化インタビューを行った。

3. 結果と考察

スケートボードを始める契機や経緯には、専用施設の有無、親の影響、友人やスケートブームによる影響があり、立場には、遊びもしくはスポーツとして行うことに対する強いこだわりは読み取れず、スケートボードを通

して何を経験したいのかという点を重視していた。滑る場所や種目は、各々が滑る経験のなかで選択する理由や目的を見つけたり、変化していた。また、対象者が感じるスケートボードを取り巻く環境には、世間から「うるさい」「危ない」「迷惑」と思われていることを認識している一方で、近年スケートボードの見方が変わっていることを実感している者も存在した。そして、東京2020の種目の決定に対する意見では、対象者全員が賛成の意見を述べており、スケートボーダーの増加と、スポーツとしての認知の広がりを願う声が聞かれた。

インタビューの結果、4名の対象者は①「非競技者」という立場で、「街中」と「スケートパーク」の両方の場所で、「ストリート」と「パーク」の両方の種目を行っているパターン、②「非競技者」という立場で、「街中」と「スケートパーク」の両方の場所で、「パーク」種目を行っているパターン、③「競技者」という立場にもとづき、「スケートパーク」という場所で、「ストリート」と「パーク」種目を行っているパターン、そして④「競技者」、「非競技者」どちらにも属さず、「街中」と「スケートパーク」の両方の場所で、「ストリート」と「パーク」種目を行っているパターンが存在することが明らかになった。

引用・参考文献

田中研之輔 (2003) 都市空間と若者の「族」文化, スポーツ社会学研究, 11:46-61